

野のはな

金城学院大学生活環境学部
(旧家政学部家政学科生活経営学科)
同窓会会報第4号
発行: 2005年9月1日
〒461-0011 名古屋市東区白壁4-64
みどり野会館内



「使命・懸命・宿命」

学長 柏木 哲夫



「総合大学としての 新しい一步」

学部長 藤城 築一

学長に就任してから一年が経ちました。「学長というのは、なんとまあ、いろんなことをしなければならないのだなあ…」というのが、一年経った後の正直な感想です。「いろんなこと」の中で入学式と卒業式は学長としての責任が重い行事です。特に式辞の時には緊張します。今年の卒業式の式辞では「使命・懸命・宿命」という話をしましたので、それを紹介させていただきます。

まず使命。数年前にテレビで放映された、クリスチヤン作家の三浦綾子さんが亡くなる少し前の言葉。「私は小説を書くことが私の使命だと思っています。使命という字は命を使うと書きます。私は小説を一冊書き終わると、くたくたに疲れます。そして命を使ったなあと思います。どんなに疲れても書き続けることが私の使命だと思っていますので、これからも小説を書き続けることに命を使いたいと思います。」「使命」というのは、命を使うことである。自分の使命とは何か、自分は自分の命をどのように使っていくのか。それを考えながら旅だってほしいと思う。

次に「懸命」。小さな島の診療所で、長い間、医療の活動を続けてきた74歳の医師の言葉。「私はこの診療所で、今まで懸命に生きてきました」。番組全体からこの医師が、島での診療に命をかけてきたことがわかった。「懸命」とは命を懸けると書く。学生が新しく社会に出て行くにあたり、使命がみつかった時に、それに命を懸けて、懸命にその道を歩んでほしいと願う。

最後に「宿命」。「宿命」という言葉はやや否定的な響きがあるかもしれない。しかし、彼が番組で、「私は、ここで診療をし続けること、そしてここに骨を埋めることが、私の宿命だと思っています。」と言った。この文脈のなかで、私は「宿命」という言葉の中に、命が宿るという意味を感じとった。一人ひとりの学生が使命を持って、懸命に生き、これが私の宿命だと思えるような人生を歩んでほしいと願う。

「野のはな」会員の皆様、お元気ですか。発足以来の歴代会長さんをはじめとした役員の皆様のご尽力により、同窓会が順調に運営されておりますことを嬉しく思っております。

さて、ご承知のようにこの4月から金城学院大学薬学部が発足しました。瀬戸電の大森金城学院前駅から坂を登ってきますと西側（旧短大）キャンパスに、本学にはこれまで無かったようなモダンなデザインの校舎が建設され、授業がスタートしました。従来、理系の学部といいますと家政学部（本当は理系という分け方はおかしいと思うのですが）のみでしたが、薬学部ができたことによって、文系・理系を含む総合大学として新しい一步を踏み出したといえます。

大学冬の時代といわれながらも、家政学部の伝統を受け継いだ生活環境学部には、282名（生活環境情報学科96名、環境デザイン学科100名、食環境栄養学科86名）の新入生を迎えることができました。この2005年度が終了しますと、ひと回り、つまり初年度の学生が卒業を迎えることになります。卒業生の就職状況が今後の本学部の社会的評価を左右することになります。特に、管理栄養士を育成することが目標の食環境栄養学科の場合は、何人の国家試験合格者を出すかが、学科及び学部、さらには金城学院大学全体の発展の重要な鍵を握っています。そうした重要な時期を迎えているだけに、教員一同気を引き締めて教育にあたっているところです。

本学部が社会的に高い評価をいただき、更に優秀な人材を育てていくための教育環境を実現するまでには、まだまだ多くの努力と時間が必要です。改めて、「野のはな」の会員の皆様のご理解と協力をお願いする次第です。

例年のように秋に総会と講演会がもたれるようですが、その折に多くの方とお会いできるのを楽しみにしております。

「野のはな」の一層の発展を祈念します。

第4回 「野のはな」 総会

2004年10月30日(土)午後1時より 金城大学E3号館教育情報東1Fラウンジにて開催

生活環境学部長・藤城榮一教授より薬学部が2005年新たに開設されるお話や、1962年発足した家政学部は2005年3月でその名を閉じるが家政の伝統は受け継がれる事を希望し、「野のはな」のさらなる発展を祈るとのご祝辞を頂戴し、速やかな議事進行の後、能楽笛方藤田流十一世家元藤田六郎兵衛氏によるトーク＆ライブを楽しみました。後のティーパーティーも90名の出席者で盛り上がり、和気あいあいの懇親会に、学園は“心のふるさと”と改めて想う日となりました。近藤博信教授、青山喜久子教授もご出席下さいました。



講演会「能楽笛方藤田六郎兵衛氏によるトーク&ライブ」



今回は能楽笛方藤田流十一世家元 藤田六郎兵衛氏をお招きし、トーク＆ライブの形式でお話と笛の演奏を聞かせていただきました。藤田流は徳川二代将軍秀忠の命を受け、京都から尾張に招かれた初代より始まる400年以上続く家柄で、現在の氏が十一代目となります。

演奏に使用された笛は初代より受け継がれ約430年前のものだそうですが、毎日息を通し、手に触れることにより楽器としての価値を高めていると伺いました。総会では、能翁より“鈴の段”と“獅子”をご披露していただき、澄み渡る独特の音色で迫力のある素晴らしい演奏を聞かせてくださいました。

氏は幼少の頃より先代である祖父の指導のもとに、笛の演奏を理論だけではなく、反復練習で厳しく身につけられたそうです。

高校、大学ではクラシックの声楽を学ばれたり、ミュージカルに出演されたりと幅広い経験が現在の多彩なご活躍の基礎になっているとのことで、氏は能を鑑賞するのに特別な勉強は必要なく、面に興味がある方は面を見て、衣装に興味のある方は衣装を、舞に興味のある方は舞に注目し、自分にあった楽しみ方をすれば良いとおっしゃいました。面白かったとか、感動する心が大切であり、特に子供のうちから豊富な体験を共有することが、物事に対してたくさんものさしを持つことにつながり、将来芸術を楽しむ基礎を作ることになると述べられました。

多くの芸術を体験していくうちに自分にあったものを見つけて下さいと締めくくられました。一同美しい音色と、興味深いお話を魅了されました。



新潟中越地震募金ご協力ありがとうございました。総会の折、有志の発案で参加者より54,900円集まり、被災地へ寄附させていただきました。(11月2日中日新聞朝刊に掲載)



ご挨拶

野のはな会長 長瀬由子

金城台を登った青春時代が色焦ることなく時を越えて輝き続け、皆様ご活躍、実践の原動力となっていると存じます。同じ環境で学んだ先輩、後輩と共に母校のお手伝いが出来ます事は光栄であり、大きな歓びでございます。お互いの交友と教養を高める同窓会として「野のはな」が益々充実した輪になります様一層のお力添え宜しく御願い申し上げます。

卒業生訪問

♥ 貴重な出会いを糧に幅を広げる染織家 ♥

家政学部1回生 小林 敬子さん



1965年頃東京銀座で目に留めた六枚吉野織の帯、これが小林敬子さんを織りの道へ導いたきっかけでした。幼い頃から陶芸や漆の職人を逗留させた数寄三昧の祖父の暮らしぶりや、着物好きの祖母を間近に見て育った小林さんだからこそ目に留まった渋い帯だったそうです。瞬時に「このようなものを自分でも！」という気持に駆り立てられ、草木染めによる機織りの世界へ飛び込み以後30余年、多くの受賞を重ねられ高い評価を得てこられました。金城学院大学新校舎にも作品が展示されています。

龍村織物の染め職人吉田富太郎氏から絹糸の練りと草木染を学び、型絵染作家であり琉球紅型研究者であった人間国宝・鎌倉芳太郎氏からは図案の基礎と製作姿勢を示され、又結城紬糸の研究者水島繁三郎氏には絵絣の種糸の作成を徹底的に仕込まれるなど、貴重な出会いを自らの糧にして作風の幅を広げてこられました。

糸の工夫をして糸使いをいろいろ変えることで、現代的な感覚も織り上げる事に成功。「透明で美しい色が染まり、織り上げると艶やかで鮮やかなものになりました。」とご苦労の後の新しい喜びを語られます。「日々の気配」や「移ろい」といった微妙な感覚を五感で受け止め、その空気感を草木に求めて糸に染め、織り上げる小林さん作品の多くは、絶妙な色の取り合わせ、柄の展開、デザイン性、そしてそれらをいかに表現するかに駆使される巧みな練りの技術など、一枚の着物に寄せる思いと感性に皆は目を見張られるまさに芸術です。近くは“美しいキモノ”秋号、“婦人画報”11月号に作品が紹介されるとの事です。

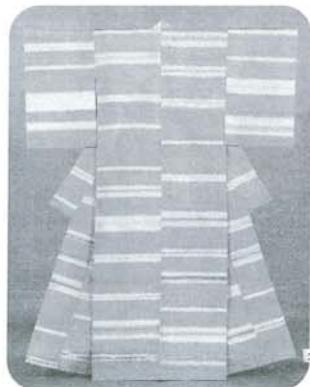
岡崎市に在住しご活躍ですが、「三河湾を望む自然に恵まれた土地で、季節の移り変わりや折々の光や風を全身に感じながら製作するのは幸せです。」とおっしゃり、織細で美しい色を納得するまで求める意欲と挑戦はまだまだ尽きません。

本年11月1日から9日迄（3日、6日休館）、東京銀座和光ホールにて“小林敬子染織展”が開かれます。

■プロフィール

小林敬子（こばやし けいこ）

1943年	愛知県岡崎市に生まれる
1973年	龍村織物 吉田富太郎に染めと練りを師事
1979年	伝統工芸東海支部展 日本工芸会賞受賞
1980年～1983年	「型絵染」重要無形文化財保持者（人間国宝）鎌倉芳太郎に師事
1982年	日本伝統工芸展初入選
1983年	伝統工芸東海支部展 愛知県教育委員会賞受賞
1985・88・95・97年	個展
1986年	日本工芸会正会員となる
1999年	愛知21世紀芸術家集団展出品（パリ）
現在	日本工芸会正会員・岡崎美術協会常任理事 作品集出版 絵絣・紬織



第8回生クラス会2005年1月30日(日)
名古屋駅前ターミナルホテル頤和園にて

卒業して30年ぶりに出会うクラスメートあり（11年ぶりに開催）出席者21名、なごやかな会となりました。担任だった水島裕先生の水と金城の金をとり、金水会という名称にしております。

田中美鈴



クラス会便り

第5回生クラス会2004年10月30日(土)
名鉄グランドホテルにて

「野のはな」総会の後、席を移し行いました。
県外からも多数参加で、同ホテルにそのまま宿泊という方もあり、時の経つのも忘れ、想い出のキャンパスライフにひとり、夜遅くまで語り明かしました。

鬼頭桃子



——キャンパス便り（2005年4月からの金城学院大学）——



女性が変わる。
女性が変える。



【新校舎 W9・10号館】
2005年春に完成した新校舎は、白を基調にしながらアクセントとして木を生かしたハイブリッドなデザイン。堅然と並んだ木製ゲートとエスカレーターが、学生たちを迎えてくれます。

「家政学部最後の卒業生として」

水野園子

2005年3月 ランドルフ講堂で、私達家政学部卒業生は、最後の家政学部卒業式を迎えました。学長、学院長の祝辞に、家政学部の歴史と社会的貢献、又2年前より新学部設立に向けて、校舎の移動があり、生徒に迷惑をかけたとの事、その間の不便な生活に頑張ってくれたとの労いのお言葉を頂きました。W6教室とは、学校の地図にものっていない階段も整備されていない大変な場所でした。これが時代の変遷かと感じる事も、時々ありました。しかしながら、授業、ゼミ内容は、将来子供を持つ女性にとって、必要不可欠であり、できれば、女性は一度は勉強しておく必要のある様々なアイテムがあり、学力、知識の高さを示す学部だったと思われます。この学部で学べた事は、私共最終卒業生にとっていつまでも誉りを持って大切にとっておきたいと思い出となる事でしょう。最後に楽しい学生生活をおくらせて頂いた金城学院の先生方に御礼を申し上げますとともに、今後の学院の発展をお祈り申し上げます。



会計報告書

(2003.10.1~2004.9.30)

お手元の会報をご確認下さい。

お祝い品贈呈ご報告

平成17年3月18日大学卒業式において卒業生（新入会員）183名に「野のはな」より校章入り“金城ファイル5枚組”お祝いメッセージ入りカードを添えてプレゼントしました。おめでとうございました。

お詫びと訂正

同窓会会報第3号「野のはな」2面水島裕名誉教授にご投稿頂いた「食文化おもしろ話」文章中、健康を祝して乾杯「All s lute！」は「Alla salute！」の誤りでした。お詫び申し上げます。

今年度は、総会ご案内及び「野のはな」会報誌は終身会費納入済の会員のみ配達させて頂きました。お知り合いの中に未納の方がありましたら、郵便振り込み 00880-6-11746 金城学院大学家政学部（生活環境学部）野のはな宛 会費5000円入金をお願いします。必ず卒業年度又は生年月日をご記入ください。不明者リストでお分かりになる方は下記迄ご連絡下さい。

『〒461-0011 名古屋市東区白壁4-64 みどり野会館内 TEL(052) 931-4480』

2005年 総会のご案内 (恩師講演とミニコンサートでティータイム)

【日 時】 2005年10月29日 (土)

【場 所】 金城学院大学E3号館教育情報棟1Fラウンジ

【会 費】 1,000円

受付 午後12時30分～

総会 午後1時～

講演会 午後1時30分～ (講師:近藤博信教授)

ティーパーティー 午後3時～ (歌:堀澤麻衣子さん)

編集後記

金城学院も社会に役立つ教育へと時代のニーズに答え、新しい女性をめざし歩み始めました。私達も卒業生に現在の大学の姿を少しでもお伝えし、さらなる発展の為お役に立てたら幸いです。活動が益々魅力的になり、豊かな人生のつながりとなります様、ご意見ご希望をお寄せ下さい。特にご投稿など積極的なご参加お待ちしております。

広報部一同